

「ハガネノツバサ」

結論から言うと、縛しばり 締しまりは間違いなく高校デビューに失敗した。始業式から誰とも口を利かず、そんな者に寄り付く者も当然おらず、ぼっちとしての地位を確立していた。

だが普通の高校生は、それを気にもとめなかった。一か月もすれば、ある程度人のキャラクターというものは認識されてくる。「こいつはこういうヤツなんだ」——害を与えるわけでもないの、そう思って皆放置していた。

普通の高校生、は。

☆

(縛しばりくん、今日も一人だなあ……)

廊下側から三列目、後ろから二番目の席。いつものように前の椅子を見つめて動かない彼に、射干田ぬばた 真寧まねはまた視線を向けた。

本を読む、音楽を聴く、スマートフォンでゲームをするなどという一人でできる暇つぶしをするわけでもなく、ただじっと前の椅子を見つめている。そういう不気味なところも、彼が避けられる原因の一つだと彼女は思う。

彼女は、彼のことが心配だった。内気なのか元来無口なのかは知らないが、友達が一人もいない状況というものには真寧には想像もできなかった。地獄といっても過言ではない。

もしかしてわたしと同じように公立受験に失敗してここへきて、そのショックがまだ抜けきっていないのか。人生に絶望して、自殺とか考えてたりするんだろうか。明日にも三面記事に「十六歳高校生自殺 受験失敗のショックが原因か」とか載っちゃったりするのかそれだめだ

「ぬばっち、はやく食堂いこ」

「……えっ？ あ、ごめんごめん。いま行くから」

入学一日目にできた友達の後を追おうとして立ち上がったら、肩を叩かれた。

振り向くと——

「落としたぞ」

「きゃっあああっあああ！？」

三面記事の顔写真が、そこにいた。さっきまで座ってたのに、いつの間にこんなところまで来ていたのか。瞬間移動したのか。

思わず二本指をおでこに当てるポーズをとってしまっていた真寧に、彼は財布を差し出す。

「落とした」

「あ、はい、す、すみませんすみませんすみませんすうだよ人生きつといいことあるよっ！」

怪訝な顔をした縛しばりをよそに、真寧は一目散に逃げだした。

……………やらかした———っ！！！！

☆

おそらく今日の夜、布団の中で悶え狂うであろうレベルのミスを犯してから数分。食堂の一角で、真寧はきつねうどんを前に突っ伏していた。

「ぬばっち、気にしないほうがいいよ。あいつだって、どうも思っていないって」

「ひにぬぬぬぬぬ……………」

「そうだよ、あいつはそういうヤツだもん。そんなに落ち込むことないよ」

「むにああ……………」

理解不能な擬音語をつぶやき続ける真寧には、いつも一緒に三人のクラスメイト——^{あや}彩・^{かの}華乃・^{あき}晶紀——もお手上げだった。教室を出てきてからずっとこの調子だ。

「べつにあいつのこと、好きなわけでもないんでしょ？ だったらいいじゃん」

「そうだけどう……………ダメなのお……………」

終わった。絶対に嫌われた。しどろもどろになっただけでなく、「人生きっといいことあるよ」などとわけのわからないことまでシャウトしてきてしまった。今頃彼の中の人物手帳には「射干田 真寧 変人」と記載されていることだろう。

あれ、待って。一応「人生きっといいことあるよ」とは言えている。ということは、彼を多少なりとも励ませたんじゃないのか。人生に絶望しかかっていた一人の青年を、もしかしてわたしは救ったんじゃないか？

「よっしゃっ！」

「あ、ふっかつした」

かくして蘇った真寧は、とりあえずこの喜びを目の前のうどんにぶつけることにした、のだが。

「いっただっきま——っすって熱つつううう！！！！」

「ぬばっち、だいじょうぶー？」

「はっははは、アホだアホだ」

すっごく恥ずかしい……………でも、すっごく楽しい。

やっぱり友達っていいものだなあ……………。

しみじみと感傷に浸った真寧に、彩が思い出したように人差し指を立てた。

「あ、そーいやーさ。ぬばっち、これしってる？」

「ん？ なになに？」

彩はいじっていたスマホで、おもむろに動画サイトを開く。

「最近ネット上で話題になってるんだけど。かっこいいよねー」

「へえ……………」

わざわざフルスクリーンにされて再生された動画は、画質が悪くまた画面が暗く、情景があまり分からない。

夜の路地裏、か？ 女性が一人、ガラの悪い男数人に詰め寄られている。……………あ、誰か来た。と思ったら、男たちが一瞬にして倒されてしまった。男たちを秒殺したその人影は、メタリックで近未来的なスーツに身を包んでいるが……………どうやら右腕がないようだ。

「あ、これ知ってる！ “ワンサイド・ウイング、だよな？”

ポーっとしていた佳乃が、別人のように声を張り上げた。

「そんなにゆうめいなのか？ 映画？」

「やあだ、ぬばっちしらないのお？ 映画なんかじゃないよ、これはホンモノ」

「えっ……うそでしょ？」

言われてみれば、あまりにも生々しすぎる。拳と鉄パイプのぶつかり合いだとか、飛び散る金属の破片だとか。

「こらこら、適当なこと言うんじゃない。なんか監視カメラに映ってたんだって。誰かのねつ造ってというのが通説だよ」

「何言ってるの晶紀ちゃん、にせものじゃないもん！ ワン様は、ほんとにいるもん！ この間だって、銀行強盗をぶっとばしたんだよ！？」

……ワン様っていうとなんか犬みたい。

「ありえないって。こんなんが現実になんのはせいぜい百年後だわ」

「ぜったいいるもん！ ぬばっちもそう思うよね！」

「そーだねー、いたらおもしろいねー……」

「それしんじてない人のセリフじゃん！ もういいもん！ ふん！」

華乃は鼻を鳴らしてそっぽを向いてしまった。やれやれ、これだからこの娘は……。こりゃ長くなりそうだ。

☆

結局華乃をなだめるのに昼休みを全て使ってしまい、真寧は階段四階分プラス渡り廊下を二つというなかなか長い教室までの道のりを、食後にもかかわらず爆走する羽目に遭った。お陰で四時間目現在、見事に腹痛に見舞われている。

(ああ、いたい……)

なぜ、食後に運動するとこうも腹が痛くなるのだろうか。今のように授業遅刻になりかかったり、早朝遅刻もギリギリでなんとか切り抜け続けている真寧にとって、この生理現象はなかなかの強敵だ。まあ、早めに行動しておけばこんなものに悩まされずに済むのだが。

(……あれ？ 縛くん、早退したのかな)

『ポーっとしているときに見る方向』というものが存在する。廊下側から四列目、最後尾の席に座っている真寧にとって、それは前方よりの右サイド。すなわち締の席である。だがそこには、今はだれもいない。

風邪かな身体弱そうだもんじゃないいつも暗いし、と勝手な妄想を広げていた真寧の心の声でも聞こえたのか、数学教諭の山田は真寧が生理的に受け付けないノイズを発する。

「ああ、そういや縛は早退したらしいよ。家の用事とかで。そんなもんで早退しないで、もっと本気で勉強してほしいんだけどね」

数学教師になった時点で真寧とはもともと相容れない存在であるこのオヤジの発する、かろうじて言語と呼べる雑音を聞き取るのは真寧にとって相当の苦痛だったが、とりあえ

ず彼がいない理由が分かってよかった。

さて、要点は聞き取ったから寝直すかと真寧は腹を決めたが、山田のほうはまだノイズを発し続ける。

「だいたいあいつ、暗いんだよね。いーっつも辛気臭い顔してさあ。おまえはこれから自殺でもすんのか！ っつの」

……今のは聞き捨てならない。教師たる者、生徒を一人の人間として尊重すべきではないのか。これはもう教育委員会に訴えていいレベルじゃないのかそしたらこいつも消えて万々歳あーっはっはあたしの人生バラ色ひゃっほー！

軽くクレイジーになった真寧。しかしクラスの反応は、彼女とは悪い方向に違っていた。

「そうだよなー。なんかいつも怖え顔で前の席ずっとみてるし……」

「え、うそ、あたしのこと見てんのあいつ？ ……キモっ」

「話しかけても無視されっしなあ。ほんと愛想ねえわ」

「正直言うと、ウザいかなあ……」

なぜだ。彼は何も、悪いことはしていない。ただちょっとシャイなだけなのだ。なのに、どうしてみんな彼をここまで悪く言うのか。

「みんな、なんでそんなこというの！ 縛くんはいいひとだよ！ 今日、わたしの財布ひろってくれたし……あの人になにをしたっていうの？」

ここが、射干田真寧が普通の高校生とは違う点だった。

誰が何と言おうと、自分の考えを迷うことなく言うことができる。自分が正しいと信じることをいかなる状況でも胸を張って主張できる。そんな人間はそうそういない。

ただ——その勇氣は、裏目に出ることも多かった。

「……はい？ もしかして射干田、あいつのこと好きなの？」

「……えっ！？ べ、べつにそなんじゃ」

「うっそー！」

「ははーん。それでぬばっち、いつも縛くんの席みてたんだあ」

「ひゅーひゅー！ おあついねえ！」

あっというまに、教室のトレンドは締に対するなじりから真寧に対する冷やかしへと転換する。

「そ、そんな……べつにあたしは、そういうことがいいたいんじゃ……」

俯き加減になった真寧を見て危険を感じたわけではないだろうが、タイミングよく山田が注意を呼びかける。

「はーい、静かにー。平常点下げんぞ、おまえらー」

その一言で一気に静かになるほどこのクラスは賢くなかったが、だんだんと話し声は消え、五秒ほどで完全に教室に静寂が戻った。

「えーとそれですぞ、このX軸との交点が(3, 0)なので……」

真寧は再びノイズをシャットアウトして夢の世界へ帰還しようとしたが、いつもならず

ぐにやってくる睡魔は、なぜか今日はなかなかやってこなかった。

☆

「バイバーイ、ぬぼっち！」

「うん、またあしたね！」

いつもの四人組も最後の晶紀が消え、真寧はついに一人になった。

真寧は最寄り駅までを公共バス、そこから学校の付近までを電車で通学している。しかし最寄りのバス停も自宅からは所要時間五分と少し離れた場所にあり、帰路の最終段階では完全に一人になる時間が生まれる。

ふと、締のことを思い出した。彼はいつも、こんな孤独を感じて生活しているのだろうか。ずっと終わらない帰り道を、延々と歩いているのだろうか。

つくづく、自分ならば耐えられないと思う。よくウサギは寂しさに死んでしまうことがあると聞くと、孤独死という言葉があるようにそれは人間にも当てはまる。人は助け合わなければ生きていけない、ポリス的動物なのだから（by アリストテレス）。

その基本概念から逸脱した彼のような、俗に『ぼっち』と呼ばれる存在は、どうやってこの先の時間を生きていくのだろうか。店員と客、雇い主と労働者……そんなドライな関係だけの世界で生きるのだろうか。そこに果たして幸せはあるのか。

（だから、この世界から縛くんをたすけてあげなくちゃ！）

彼女自身は自覚していないが、真寧の本質は、『仕切りたがり』である。ひとりぼっちで寂しそうにしている人間がいればどうにかしようと奔走し、勉強もそこそこでき、学内活動ではいつも先頭に立ってみんなを指揮する。

しかし——そんな社会的に見て素晴らしい人間が、現実の世界では受け入れられないことがあることも、また事実。

☆

（そういや、家族とうまくいってるのかな……）

ああいう『ぼっち』に分類されるような人間は、家族とうまくいっている場合といていない場合が分かれると思う。たとえば『俺の妹がこんなに可愛いわけが……』というシチュエーションのように、特定の家族と過剰にうまくいっている場合もある。

はっ！ 考えてみれば、縛のどこか影を帯びた、悪く言えば暗いオタクっぽい印象は、そっち系のアニメの主人公に通じるものがある。もしかすると、家では妹とあんなことやこんなことをきやああ

「あっ、すみません」

独想にふけりすぎて完全に前方を見ていなかった真寧は、前から来た人影にぶつかってしまった。

「あ、すみません……ってきやああああああシスコンくん！？」

「いや、別に俺に妹はいないけど」

「あ、縛くんごめんなさいごめんなさいごめんなさいっ！」

「ただ。なんで今日はこんなにもこの男に翻弄されるのだ。」

「で、でも、その、きょうは家のそうじで早退したんじゃ……」

「ようじ。もう終わったから、今家に帰るとこ」

「あ、そうなの……」

「おう」

「……………」

「……………」

「気まずい。話題が何も見つからない。」

「何かないか何かないかと上から下まで締の全身を見回してみると。」

「あれ、そのケガどうしたの？」

「右腕に、切り傷らしきものがあった。血は出ていないようだが、痛そうだ。」

「ああ……これは、ちょっとな。でも、大丈夫だ」

「大丈夫なことないよ！ 早く手当しないと、ばいきんが入ってばいきんまんになっちゃうよ！」

「ばいきんまんにそんなゾンビみてえな特性はない」

「いいから！ ちょっとみせて」

「真寧は締の手をとって、傷を見てやろうと思った、のだが——」

「さわるなっ！」

「きゃっ!？」

「真寧が右手に触れようとした途端、締はその手を拳に変え、真寧を殴り飛ばした。」

「痛っ、た……」

「あ……ああ……」

「自分のしてしまった事の重大さに気づいたのか、締の顔から血の気が引き、体はだんだんと後ずさっていく。」

「ち、違う……俺は……っ！」

「ま、まって縛くん！」

「真寧の静止も聞かず、締は走り去ってしまった。その間、こちらを二度と振り返ってはくれなかった。」

「……はあ……行っちゃった……」

「右腕に何かコンプレックスでもあったのだろうか。だとしたら申し訳ないことをしてしまった。」

「しかしそれ以上に、真寧には気になることがあった。」

「(縛くんの手……なんか、硬くて冷たかった……)」

「殴られた瞬間に真寧が感じたのは、柔らかくてあたたかな質感に包まれた人間の拳の感触とは明らかに違う——硬質で冷たい、金属的な感触だった。鋼でできた籠手か何かで殴られたようだった。」

(どういふこと……？ もしかして、人間じゃないとか……)

まさかそんなわけは、と否定しかけて、真寧ははっと気づいた。

もしも彼が人間でない——例えばアンドロイド、とか——とすれば、いままでの彼の行動にもまあ説明がつく。誰とも関わりを持たないのは、自分の正体を隠すため。暇つぶしもせず前の席をずっと見つめているのは、退屈という感情(機能？ 思考？)が存在していないため。

(なるほど……そういうことだったのかあ……)

締が友達を作らないのは、作れないのではなく、必要としていないから。自分の機能もしくは習性に何ら支障がないから。非現実的な割に、なかなか優秀な仮説だ。

——でも。

(だったら、知ってもらいたいなあ……)

友達の良さを。みんなに受け入れてもらえる喜びを。

確かに彼は友達がいなくても生きていけるかもしれない。むしろ友達などというものは、彼にとっては無駄なものではないのかもしれない。

でも無駄なものだからといって、存在してはいけないということはない。数値的には無意味で無価値なものであろうと、ひとかけらのスパイスは人生(彼の場合『人』と言っていいのかわからないが)には必要だ。たとえ人でなかろうと、自分の一生を楽しむ権利はあるのだ。

だから、無機質な彼に楽しみを知ってもらいたい。あたしが彼の最初の友達になろう。そして、彼の世界を広げてあげよう。

まだ少し痛む頬をさすり、真寧は決意も新たに家路をたどった。

☆

翌日、である。頬には結局傷が残り、本日は麗しき面にばんそうこうを貼っての登校だ。

「ぬばっち、顔どうしたのおー？」

「ほんとだ、せっかくの美少女がだいなしじゃん！」

「び、美少女なんてことないよ！ ちょっと転んだだけ」

と言いつつも、ほのかに自分の顔には自信がある。クラスに一人いるくらいのマドンナ……ってとこかな、うふふ。別にクラスメイトを見下しているわけではないが。

そんなことよりも。

「縛くん、おはよ！」

「……あ？ ああ」

……席の真ん前に来てまで言ったのに、なんだこの塩対応は。

でも射干田真寧、ここであきらめる女じゃなくてよ！

「今日、なんか機嫌いいね。いいことでもあったの？」

もちろん当てずっぽうである。締の鉄面皮はいつもの如く一ミリも動いた気配などない。適当な答えを期待した真寧だったが、締はその期待を軽快に裏切った。

「……昨日は、悪かったな」

What? 会話が成立してマセーン! ミーの話聞いてマシタカ? というかあたし自身昨日のことなんて全然気にも留めなかったからそっこいで忘れてたのに、なんでくりかえす? このポリリズム? あの衝動はまるで恋じゃなかったよもしそうだったらあたしドMになっちゃう

と、怒涛のツッコミを心中で入れた真寧であるが、それを声に出せるはずもない。

「あ、ああー……いいのいいの、全然気にしてないよ」

「いや、でも」

「いや、ホントだいじょぶだから」

「いや、だいじょばなさそうだし」

「いや、だいじょうぶだいじょうぶ」

「いや、でも」

くりかえすこのポリループウウウウウウウ! ああプラスチックみたいな会話だ! いつまで続くのこれ! そしていつまで続くのあたしのパ〇ュームツッコミ!

「もうっ、いいっていいってでしょ! この話終了!」

「そうか……お前がそう言うなら……。それと」

「……なに」

少し苛立ちを感じ始めた真寧は、締の急に変わる声色に戸惑う。

「俺と関わると、ろくなことはない。やめておけ」

「……………」

これは、自分が人ならざる者ゆえの苦悩からのセリフというやつじゃあないのか。何となく哀愁も帯びていたように聞こえた。凄んでいるふりをした救難信号じゃないのか、これは!

「大丈夫だよ。縛くんが何者でも、あたしはあなたの味方だから」

精一杯慈愛に満ちた表情を作って、真寧は締に微笑みかけた。

だが、そこから得られた結果は、真寧が予想していたものとは大幅に違っていた。

「……お前、ちょっと来い」

「えっ!? ちょっと、急に何」

締は強引に右手で真寧の左手首をつかみ、教室の出入り口に向けて歩き出した。

何これ! あたしの人生、十六年目にして急展開!?

☆

「はあっ、はあっ……いきなり、なに……?」

もうすぐ一時間目が始まるというのに、わざわざ屋上まで連れてこられた。とりあえず授業遅刻は確定だ。

それにしても、何でわざわざこんなところに? よっぼどのことなの? ……まさか、ほんとに人間じゃないの?

思索を巡らせていた真寧の手首を、締はやっと離れた。

「ちょっと、どういうことなによわっ!？」

と、思っ^て尋問を開始しようとしたら、締は突然真寧の後ろにあった壁にガキンと右手をついた。

同時にチャイムが鳴った。

……ちょっと待って、何この少女漫画みたいなシチュエーション! 鳴り響くチャイムの音とか、気まずい沈黙とか、それっぽすぎるんですけど! ……ちょっと、目、そらしてよ……その、なんか、変な気分になってきたじゃない……このまま、『好きだ』、とか……? そんでその流れでキス、とか……? さらにそのまま保健体育の一時間目とかきやああああああこれはダメ

「俺が何者か、知っているのか？」

「ひゃうっ!？ ……えっ、ど、どゆこと」

「……いや、何でもない」

そう言っ^て、締はあっさりと壁から手を離して背を向けた。そうですね、すいません。でも。

「待って! 何でもない、ってことはないことは、知ってる」

「……何だと」

締は振り返った。

「そ、その右腕……………一体、なんなの？」

この言葉をひねり出すのにかなり苦心した。でも、聞くな^ら今しかないと^思った。

締の目の色が変わった。

「お前、どこでそれを」

「昨日殴られたとき。縛くんの手……なんか、機械みたいに冷たくて硬かった。それとさっき掴まれたときもそうだったし、とどめは今の壁ドン。壁に当たった音が、あからさまに金属の音だった」

「くっ……感情が高ぶると、やはり利き手を使いがちになってしまうようだ……改善していかなければ」

締は悔しそうに眉間に皺を寄せて続けた。

「知られてしまったものは仕方ない、正直に話そう。俺は、俺のこの右腕は——」

「……………」

ついに、ついに縛くんの秘密が明らかになる。真寧は緊迫感を抑えるのに必死だった。

「——俺の右腕は……義手、なんだ」

「……………え？」

アンドロイドとかじゃないの? 改造人間とかじゃないの?

常人ならば真っ先に挙げるはずの選択肢を、その想像力ゆえ完全に見落としてしまっ^たことに、真寧は今更気づいた。急に自分が恥ずかしくなってきた。

そんな真寧の感情もつゆ知らず、締は告白を続けた。

「中二の時に、トラックに撥ねられて腕を轢き潰された。見た目には全くわからないだろうが……そういうふうにできている、としか言えない」

「あ、そうなの……でも、それ先生は知ってるの？」

「いや、この学校の人間は誰も知らない。お前だけだ」

「あたし、だけ……二人だけの、ひみつ……」

……はっ！ ちがうちがう、そんなことはどうでもいいって！

「それってまずいんじゃない！？ 入学するときの書類にあるじゃん、『何か留意してほしいことがあれば書いてください』みたいなやつ！ なんで書かなかったの？」

照れ隠しに真寧が怒涛のように追及すると、締はゴミでも見るような目つきになった。

「……お前、バカか」

「はあっ！？」

「この『腕』のことが知られて、俺に得なことなんて何一つないだろう。むしろ損しかない」

「でも、ちゃんと知ってもらわないと、何か問題があったとき困るでしょ？」

「今までこの腕に、何か問題があったか？」

「……………それは、なかったけど」

見た目には全く不自然さはないし、動作にも機械的な感じはしない。機械音もしない。普通の腕にしか見えない。

「俺は普通でいたいんだ。『留意』なんてされたくはない。それにこの腕のことが知れてみる、お前らは俺を化け物扱いするだろうよ」

「そんな、こと」

しない、とは言いきれない。昨日のクラスの反応も然り、世の中善良な人間ばかりではないのだ。もしかすると彼をいじめたりする者も出てくるかもしれない。

「でも、悲しいことだし、認めたくないことだけど……縛くんはもう、みんなにハブられてるよ。誰ともしゃべらないし……なんでみんなと話さないの？ なかよくなりたいうって、おもわないの？」

「……ああ、思わないね」

締はぎこちなく、真寧に再び背を向けた。

「なんで？ いつもひとりぼっちで、さみしくないの？」

「……………ああ、全く、な。友達なんて無駄だ。必要ない。邪魔でしかない。何の意味もない。それにそんなものを作ったら、俺の義手のことが明るみに出てしまう。そしてそいつらは俺から離れていく。……友情なんてものは、そういう脆いものなんだよ。コワレモノにすぎくらいなら、俺は一人でいる」

その声は、わずかに震えていた。

「意味がないなんて、そんなわけないよ！ 義手だって受け入れてくれる人がきつといるよ！」

「はあ？ そんな変わり者がどこにいる」

「……ここに」

真寧は、真摯に締を見つめた。

「お前がか？ フッ、バカバカしい」

「バカバカしくなつかない！ あたしが、縛くんの友達になるの！ 友達なんて無駄だ？ 必要ない？ 邪魔でしかない？ 何の意味もない？ そんなに何重にも否定したら、嘘だってバレバレだよ！ ほんとはさみしいんでしょ！？ だから、あたしが」

ドゴンと、締は再び壁に手をついた。コンクリート製の壁に亀裂が入った。

「何度も言っているだろう、そんなものは俺には必要ないんだよ。とっとと失せろ」

締の脅しにも、真寧は一步も引かず彼を見据えた。

「……いや。友達に、なる」

「チッ……お前の友達だって、いつお前を裏切るか分からないぞ。人は結局は一人なんだ。友達ってのは、そういう不安定な関係なんだよ」

「彩たちは、そんなことなんてしない！」

「ケッ、あいつらがねえ……忠告しておくが、あいつらこそ最も信用できねえよ。あいつらと関わると、痛い目を見る」

「何を根拠にそんなこと言うの！ 彩たちは、そんな子じゃない！」

「なぜそれを確信できる？ それに、すでにクラスでハブられ始めている俺に味方しているというだけで、お前もハブられるようになるかもしれない。それでもお前は、俺の友達になろうと思うか？」

「当たり前じゃない！ たとえ一人になっても……その時は、縛くんがいるから」

確信。人を信じる真寧の心には、一点の曇りもない。

その心理を、締は理解できなかった。

「……とんだ重症だな。いつか身を滅ぼすぞ」

「滅んだって構わない。人を疑って一回得をするよりは、人を信じて百回損をしたほうがいいよ」

「……………フン」

締は三度踵を返した。

「金輪際俺に話しかけるな。それと義手のことをバラしたら、容赦はしない」

「言われなくても誰にも言わない。縛くんを、傷つけたりなんかしないもの」

信念のこもった真寧の言葉に、締は応えもせず立ち去った。

☆

その後今日一日の授業は、全く頭に入らなかった。ずっとずっと同じような思考を堂々巡り、気が付きや終礼である。

……縛くんの心の間は、思った以上に深かった。しかもその原因も想定外に重かった。

(義手、か……)

中学生の時に交通事故に遭って、右腕を失って……やっと思手を手に入れたと思ったら、今度はそのことでいじめられて。なんと不幸な人生か。果たしてそんな陰惨な過去を、自分に乗り越えさせることができるのか？

やはり、余計なお世話なのだろうか。小学生の時、教室の隅っこの子の落とした鉛筆を反対側の隅っこから拾いに行きあげたような。あれと同じなのか。

でも、余計なお世話だったとしても、あたしは鉛筆を拾いたい。困っている人がいるなら、助けてあげたい。

縛くんは明らかに孤独に耐えきれていない。普段は鉄面皮でやり過ごしているが、心の内では寂しさに打ちひしがれているのだ。今はかろうじてプライドが彼を支えていても、それが決壊して不登校になるのも時間の問題かもしれない。むしろ中学二年のときからよく今まで耐えた。もうそろそろ救われてもいいはずだ。

ただ今は、そのちっぽけなプライドがさしのべられる手さえも跳ね返してしまっている。どうすればそれを拒まないでもらえるのか。

「はあい、それじゃ号令ねえ」

「起立！ 礼！」

『さようならー』

お決まりの棒読みのあいさつで、今日の授業も締めくくりだ。なんだか今日は、不完全燃焼だったなあ……。

「ぬばっち、いっしょにかえろー」

「あ、はいはいー」

悶々としたまま一日が終わる。

と、真寧は思っていた。

☆

学校を出て数分。最寄り駅まであと少しという人通りの少ない道で信号に引っかかってしまい、真寧たちは歩みを止めた。

「ほんと今日だったわー。数Ⅰ二連続はないわ」

「ほんとねー……二連チャンで山田とか地獄でしかないよー……」

「え、うそー！ わたしは数学好きだけどな」

「マジで言ってる！？」

晶紀の発言に、彩も真寧も耳を疑った。

「晶紀……あんたいくら理系でも、数学は山田だよ！？」

「そうだよ、頭おかしいんじゃないの！？ とうか理系っていう時点で頭おかしいんじゃないの！？」

「とりあえずその理論は確実に間違ってるよ、真寧……。山田先生は言ってることはムカつくし極論だけど、そんなに間違ったこと言っていないよ。それなりに生きてきたわけだし、一応心の指針ってものは確立してる。もしかしたら、自分でムカつくキャラを演じてるのかも」

「にやるほどねえ……でもあの性格は演じてはないな。確実に地だわ」

「うんうん」

あれがもし演技だったとしたら、今この場でアカデミー賞助演男優賞を贈りたいくらいだ。むむ一、やはり頭のいい人の考えることはよくわからん……。

ちなみに華乃は今日はお休みだ。あの元気な子がなんでも熱が四十度もあるとか……山田のヤローは『ほんと、このクラスやる気あんのかねえ』とか抜かしていたが、やる気とかの問題じゃないだろ！ 四十度の熱で授業なんぞ受けられるか！ そしてあんたはそんな生徒のいる教室で授業したいと思うのか！

「えー、分かんないよー」

「いやいや、ないってないって」

信号が青になり、三人は再び歩きだした。

瞬間、真寧の背筋に寒気が走った。

(なんなの、この感じ……なんか、すっごく嫌な予感が……)

思っていたよりも早く、それは的中した。

「そこの女の子たち！ 早く逃げなさいっ！」

少し離れたところにいた男性の声と、ギャルルルッという轟音に振り返ると——死角から現れた暴走したトラックが、晶紀を撥ね飛ばそうとしているところだった。

「あぶないっ！！」

真寧はとっさに晶紀を突き飛ばす。

その結果。

「きゃあああああああっ！！！！！！」

晶紀と彩の悲鳴が聞こえる中で、真寧は宙を舞った。

時の流れが、いやにゆっくりと感じられる。地面がゆっくりと近づいてくる。

(ああ……あたし、死ぬのかな……)

十六年……長いようで短かった。やりたいこともたくさんあったけど……友達のために死ぬなら、別にいいかな……。

衝撃と共に、体が地面に落ちた。夕焼けの空が見えた。これがあたしが最後に見る景色か。悪くない。

そこで、終わると思った。

「待ってえええええええええっ！！！！！！！！！！」

なに？ まだ、なにかあるの？ あたしは、別に思い残すことなんてないよ？ このまま、消えていくの

ぐしゃっ。

「きゃっあああああああああああああああああ！？」

ゆっくりとした時の流れのまま、左腕にじわりじわりと激痛が走る。指の先から、じゅくじゅくと押しつぶされていく。

肩口まで完全に潰されたところで重圧は消えた——トラックは走り去った。

「はやく！ はやく救急車を！」

「ああ……ぬばっちが……！」

「きゃあっあああああああああ」

彩と晶紀の声も、激痛にかき消されてもはや耳には入ってこない。
ただ痛みだけが心を支配する。

「君たち、落ち着け！ まず歩道に運ぶんだ！」

さっきの男性の声が聞こえた。せわしない足音が聞こえた。

そこが、限界だった。

(もう……ダ……メえ……)

激痛に耐えられない。意識が遠のいていく。

その瞬間に、ふと締の顔が頭をよぎった。

(ああ……縛、くん……)

そうだ。あたしはまだ死ねない。彼を救えるのはあたしだけなんだ。こんなところで、死んでなんかいられないじゃない！

「る……くああ……」

残った右手を地面に突き立て、真寧は立ち上がろうとする。

「ぬばっち、無理すんな！ ちょっと、救急車まだ！？」

「ああ、かみさま……おねがい、ぬばっちをたすけて……」

「くうっ……はあっ……はあっ……はあう」

ぱたりと、真寧は再び地に崩れ落ちた。やはり無理だった。もう一歩も動けない。

消えゆく意識の中で最後に見えたのは、真っ赤な夕焼けではなく、黒くひび割れたアスファルトだった。

☆

「……！」

目が覚めた。

身体が重い。

薄暗い。

寒い。

「えっと、どうなったんだっけ……。あたし、生きてるの……？」

確か、華乃が休みで、晶紀と彩と三人で帰ってて……信号待ちでしゃべってて。

(……！)

そうだ。暴走したトラックが急に突っ込んできて、あたしは晶紀をかばって撥ねられたんだ。

はっと左腕を確認した。そこには――

(あ、ある！？)

ある。確かにあの時、完全に轢き潰されたはずの左腕が、ある。

血が通っている……そんな感覚もある。試しに握ってみようとする
と、握れる。

だが触覚はない。柔らかい肌の感覚はない。右手で触れてみると、
金属的な感触があった。

(金属的な感触！？)

そう。これは、縛くんの右手に触った時と同じ感触だ。冷たくて、
硬い。

(もしかして、義手！？ それも縛くんと同じ！？)

どうして、彼と同じ義手が。

そもそもここはどこなのか。ひび割れたセメントの壁、錆びた鉄
格子……牢獄？ なぜ、病院ではなくこんなところに？

「やあ、目が覚めたようだね」

疑問の渦に吞まれていると、最後の瞬間の直前に聞こえた声がし
た。

「……あなたは、事故の時にいた……」

信号を渡るときに真寧たちに声をかけた男性。フレームレスの眼
鏡をかけ白衣を着た、気のよさそうな三十代くらいの男だ。

「さてさて……これから君には、二、三やってほしいことがある。

ちょっと失礼」

そう言うと男は鉄格子のカギをガチャガチャとやり、扉を開けて
牢に入ってきた。

「あの……なんであなたがここに？ ここはどこなの？ この腕は何なの？」

「それは後で説明する。さあ、左腕を出して」

男は真寧が寝ていた硬いベッドの、真寧の左隣に座った。

「あ、はい……」

真寧が言われるままに左腕を出すと、男はその二の腕辺りを触っ
た。途端、

「きゃっ！？」

バシュッと音がして、肩口から手の甲にかけて腕が開く。中は見
た目も完全に金属で、関節部や各部の真ん中には原動力とおぼしき
水色の玉……が、合計七つ。

「この『腕』の真価を發揮させるには、キミの声をオーブに登録しなきゃならない。これか
らいくつかの言葉をキミに言ってもらおう。それから全て説明しよう」

「は、はい……」

なにこれ、どういう状況？ でもまあ、言われたままにするしかないか……。

「まず一つ目。"Installation、"」

「い……いんすとーれいしょん」

「二つ目。"Deadly blow Glory Lupinus、"」

「……でっどりーぶろー、ぐろーりー・るぴなす」

「三つ目。"Operation、"」

「おペれーしょん」

「四つ目。"Liberation、"」

「……りべれーしょん？」

「うん。OKだ」

「……………」

よく分からないまま、終わってしまったようだ。まあ、目覚めてから今まで理解できた出来事などひとつもないが。あと『シヨン』多くない？

「……早く、いろいろ説明してほしいんですけど」

「あ、そうだね。これで初期設定は完了だ。説明に入るとしよう」

男が先ほどと同じ部分に触れると、ボシュッと音を立てて左腕は元に戻った。

「ボクの名は^{たのうえみつひこ}田之上光彦。肩書きは闇医者だったり、義肢の製造業者だったりいろいろあるが……今キミの前にいるボクは、『死の商人』だね」

「しの、しょうにん……？」

「聞いたことないかい？ ……『武器商人』と言えば、分かりやすいかな？」

「……！？　なんでそんな物騒な肩書きの人が、あたしを」

「助けた、と言うのも少し違うね。なぜならあの事故を引き起こさせたのは、ボクなんだから」

田之上は、不敵に笑った。

「……引き起こさせた！？」

「そうさ。キミをその左腕……『Reverse Cross System Ver. 5.0』の、実験体にするためにね」

待ってくれ。待ってくれ待ってくれ待ってくれ。全然話が飲み込めない。

「おっと、何が何だか分からないって顔をしているね。まあ当然だな……よし、一から説明してあげよう。

キミのその左腕はね、実は兵器なんだよ。それも世界の軍事常識を塗り替えるほどのね。

……サイボーグって、聞いたことあるかな？ 改造人間ってやつさ。どんな攻撃にも一切揺るがず、敵を薙ぎ払う無敵のヒーロー……キミも一度は見たことあるだろ？

ボクは二年前、ついにそれを完成させた。しかしボク自身の身体は、自分を使った度重なる実験ですでにほとんどがサイボーグ化されていたから、実験が行えなかった。

そこでボクは、他の人間を使って実験を行うことにしたんだ。体格がボクと同じくらいの中学生を部下に車で轢かせて、その子に『腕』をくっつけたのさ。でも、生憎その子には逃げられてしまってね。どうも強く作りすぎたらしい」

……ちょっと待て。二年前に、中学生を轢かせて、腕をくっつけた？ それって、絶対——

「その後ボクが所属する兵器密輸組織の人たちや、三人の部下も実験体にしてみたけど、満足のいく出来にはならなかった。そこで新たな実験体としてキミが選ばれたというわけさ。もちろん、今後キミに自由はない。死ぬまでデータをとらせてもらうよ」

さらりと田之上は恐ろしい発言をした。しかし真寧の中にあっただのは、たった今聞いた、驚愕の真実だった。

「縛くんを……」

「ん？ 何だって？」

「あなたが、縛くんの右腕を！」

「シバリ？ ああ、Ver. 0.0 のことか。最後まであいつ名前を言わなかったが、そんな変わった名前だったんだな。別にどうなってようが今さらボクの知ったことじゃないけど」

朝の星座占いを聞き流すように、田之上は興味なさげに呟いた。

その態度は、真寧の怒りの炎をさらに燃やした。

「あの義手のせいで、縛くんの人生はめちゃくちゃにされたんだよ？ 人の人生引っ掻き回しておいて……何て無責任なの！」

「そんなガキ一人の人生がおじゃんになったところで、この開発には何の支障もないだろ。この鎧は、核爆発に巻き込まれたって無傷でいられるんだぞ？ そんな素晴らしい発明に比べたら、一人の人生なんてちっぽけなものだよ」

「……………あなたは、人の命をなんだとおもってるの！」

「うむ、キミの言い分もわかるよ。確かに人の命は尊い。だがボクの発明に比べれば、道に転がった空き缶にも及ばないね」

狂っている。この男は狂っている。人の命より大切なものなど、あってなるものか。

激昂した真寧。だが新たな衝撃が、彼女を襲う。

「おっ、やっと目が覚めたの？」

「……………！？」

聞きなれたこの声。高校に入学して間もない頃、緊張していた真寧に、はじめてかけられた声。

「彩！？　なんで、彩がここに！？」

短めのショートカットに、切れ長の目。鉄格子の外に立っていたのは、まぎれもない彩だった。

「あやぼんだけじゃないよお」

「うんうん。わたしたちも、忘れてもらっちゃこまるな」

「華乃！　今日は熱で寝込んでるんじゃないの！？　それに、晶紀まで！」

くると巻かれたツインテールと艶やかに流された長い黒髪も、続けて姿を現した。

「驚いたかい？　彼女らがさっき話した、サイボーグ化した部下さ。まあ、ボクが親代わりをしているんだけど。それぞれ彩ちゃんは Ver. 0.1、華乃ちゃんは Ver. 1.3、晶紀ちゃんは Ver. 4.2 だ。タメ口を許しているのは、ボクの寛大さ故だね」

「そん……な……今まで、ずっと、あたしをだましてたの……？」

「その通り。あたしたちはみーんな、ニセモノの友達だったってわけ」

「そうそう。結果的にあなたは、ほんとの友達なんて一人もいない、ただのぼっちだったんだよ」

「あ、でも、かのは楽しかったよお？　ぬばっちを撥ね飛ばして轢き潰すの……うふふ♪」

「！？　華乃が、あたしを！？」

「そうだよおー。ものすごい悲鳴あげてたねえ……ぬばっち、すっごくかわいかったよお」

華乃は今まで真寧に見せてきた顔からは想像できないほど、嗜虐的な笑みを浮かべていた。

「あ、ちなみに、縛くんの腕を轢き潰したのもかのだよ。あの子の悲鳴も、もう一回聞きたいなあー……くひひ」

「嘘………嘘でしょ……？　みんなグルになって、あたしをからかってるんでしょ？　だって、華乃はそんなこと言わないもん！　華乃は優しい子だもん！」

「うっせえな、黙れよ！」

彩が鉄格子を蹴った。

「何度も言わせんじゃねえ。これがほんとのあたしたちなんだよ。だいたいあたしは、あんたみたいなやつがいちばん嫌いなんだ。アホみたいに純粋に人を信じる、頭ん中お花畑の甘々のお嬢様がなあ！」

「彩も……なんでそんなこと言うの？　ぶっきらぼうで男っぽいけど、いい子だったのに！」

「……ぬばっち。いい加減に理解しないと、そろそろうざいよ？　ほんとのわたしたちは、ぬばっちが思ってるような善人なんかじゃない。悪党なの♪」

晶紀が嘲笑した。

「晶紀、まで……そんな……だれか、嘘だっっていつてよ……だれか」

「フヒヤハハツハハハハ！　その顔が見たかったあーっ！」

力なくうなだれた真寧を前に、田之上は唐突に笑い声をあげた。

「ヒャッヒヒヒ、わざわざ手の込んだ真似をした甲斐があった！ ボクはね、人の絶望する顔っていうのが、だぁーいすきなんだ！ 彩ちゃんたちの受験の日にわざわざ学校前に品定めに行って、ターゲットを決めて、いろいろ個人情報なんかを調べて……本当に手間がかかったよ！ でも、丹精込めて育てた稲は、やっぱり大きく実ってくれるものだなぁーっ！」

そんな……あたしの周りのものは全部、つくりものだった……こ

の男が仕組んだ、茶番劇だった……

「ヒャハハ……さあて、ボクはもう存分に楽しんだ。データをとるのは明日からだから、あとはキミたちの好きにしていよいよ。今まで溜まっていた鬱憤を晴らすもよし、ただ純粋に楽しむもよし……煮るなり焼くなりどうにでもなさい。殺さない程度にね」

「やったあ！ むばっち、今夜は素敵な夜になりそうだねえ」

「ちょっと華乃、あなたがやったら下手したら死んじゃうよ？ 五体満足じゃないと、ちゃんとしたデータがとれないよ」

「だいじょうぶだいじょうぶ、加減するから♪」

「でも、骨の一本二本は覚悟してもらわねえとなぁ……あたしたちもストレスたまってるだよ、ひやはは」

ベッドを立った田之上と入れ違いに、三人が入ってくる。彩は首、華乃と晶紀は指の骨をコキリと鳴らして。

「い……やぁ……こ、こないで」

骨折でところどころにギブスやサポーターが取り付けられた体をどうにか動かして狭いベッドの上を後ずさったが、すぐに背中が壁についてしまう。その間にも彩たちは一步一步真寧に近づいてくる。

(もう……ダメっ……！)

迫りくる暴力の意思を前に、真寧が腕を搔き抱いた、瞬間。

「！？」

右側で、どぐわしゃんという強烈な破砕音と共に、牢獄の壁が破壊された。

「っ！？ なんなの！？」

「けほっ、ほこりがのどにはいるよぉー」

さすがは武器商人の義娘だけあって、彩たちは比較的落ち着いた反応を見せた。しかし――

「お前ら、また同じような手口を使って人を騙しやがって。今度こそ逃がさない」

立ち込める粉塵の向こうから聞こえてきたその声には、全員が度肝を抜かれざるを得なかった。

「嘘…………！」

「な……なんで、お前が！」

「なんだいなんだい、今の音は……………」

騒ぎを聞きつけてすぐに戻ってきた田之上も、これには言葉を失った。

「だから言っただろう。いつか身を滅ぼす、と」

やっと収まった粉塵の先に立っていたのは——縛^{しばり} 締^{しまり}、その人だった。

「バカな……アインヘリアル、なぜお前がここに！」

「お前らのあとをつけて研究所の位置を確認し、一度戻って策を考えてからここへ来たんだ。……お前らだけは、絶対に許さない」

締は吐き捨てて、右腕を前に突き出す。

「……………インストレーション！！！」

締がそう叫ぶと、その右腕の表面が、突然波打つ。そして指の先から上皮が身体をつたい、全身を覆っていく。

「……まずい！ 装着が完了する前に、殺せ！」

田之上が言うよりも早く、彩たちは動き出していた。手刀をつくり、締の喉を狙う。

しかし。

「……………無駄だ」

移動している上皮の一部が小さな盾となり、三人の手刀を阻む。その間にも上皮は締の身体を覆ってゆく。

ついに鋼色に完全に覆われたその姿に、真寧は驚愕した。

「これって……！」

『アイアンマン』のような近未来的なスーツに覆われた、片腕の戦士。腕や脚の各関節部には、それぞれブースターらしきものが取り付けられており、胸元には逆十字のエンブレムと、『Reverse Cross System Ver.0.0 Einherjar』の文字。……彩が動画を見せてくれた、"ワンサイド・ウイング"、そのものだった。

「うそ……縛くんが……？」

「さて……お前ら全員、ただで済むと思うなよ」

鋼の闘士の復讐が、今始まる。

☆

「チッ……おまえたち、やってしまえ！」

田之上の号令と同時に、彩は右腕、華乃は両脚、晶紀は左腕を出し、

「「「インストレーション！！！」」」」

起動音声を叫ぶ。締と同じように三人の各部の表面が波打ち、上

皮が体を覆う。

その様を、締は無表情で眺めていた。

「装着の邪魔はしない。全力のお前らを叩き潰してこそ、価値があるからな」

「ハッ、強がりはお勧めしないぜ？ いくらあんたでも、あたしら三人を同時に相手は辛いだろう」

彩が言った数秒後、三人の装着は完了した。

全員が白を基調としたデザインに、彩は紫、華乃は黄色、晶紀は桃色の装飾がところどころに施されている。また、頭部はそれぞれの髪形を模したようなデザインだ。

彩は締と同じように右腕がなくなり、各部にブースターがついている。特筆すべきは、装甲が厚くなっている両足だろう。どうやら接近戦に特化したタイプのようなようだ。

華乃は両脚の付け根から先がなくなり、脚の切り口と背中についた浮遊装置らしきもので宙に浮いている。肩や手に取り付けられた銃火器が主な武器らしく、こちらは遠距離タイプか。

晶紀は……というと、特に体に欠損部位はなく、ブースターもついていない。ただ、左腕が少し細くなり、指と指の間から物騒な針が飛び出している。こちらはどうやら接近戦タイプらしい。

ちょっと待て。こんな超人どもの戦いに、こんな狭い空間で、今からあたしは巻き込まれるというのか！？ ……隅っこでじっとしよう。

田之上は、危険を察知していたのかすでにこの場にはいない。どこまでも汚い奴だ。

「準備完了だ……いっくぜええええええええっ！！！！！！」

その掛け声で、彩、晶紀の二人が飛び出す。華乃は後方支援に徹し、三人の戦闘の間隙を狙って遠距離攻撃をぶち込む作戦のようだ。

が——

「……遅い」

「「「！？」」」

締の脚が一閃したかと思うと、彩と晶紀は華乃を巻き込み、反対側の壁に音をたてて激突していた。

「があっ、は……」

「は、速い……？」

「げほっ、ふたりとも、どいてよおー」

一瞬にして態勢を崩された彩たちを、締は冷やかに見据えた。

「雑魚どもが。彩、お前は0.1世代……つまり田之上が強く作りすぎて逃げられた俺の、直後にできた試作品だ。当然俺よりは弱く作られているわけだな。遠距離タイプの華乃も、接近すればどうということもない。そして晶紀……お前には、ブースターすらついちゃいない。

「……やはり、遅いな」

彩と締の間で、何かが閃いた——かに見えた次の瞬間には、彩は勢いよくこちらに吹き飛ばされていた。

……………え？

「きゃああああっ！！」

かろうじて真寧が緊急回避した直後、彩は壁に激突した。

「げ、ほっ……ごふっ、おええ」

「彩……………」

足に集中していたブースターが全て破壊され、中にあった水色の玉も全て砕け散っている。そのせいか、装甲も剥がれ落ちはじめた。

Reverse Cross System Ver. 0.1 『ヴァルキリー』、沈黙。

「そんな……ただの回し蹴りで、彩ちゃんが！」

「……………あんた、よくもあやぼんをっ！」

「壊すに留めただけまだマシだと思え。お前らは、こうはいかない」

次はお前らの番だと、締は晶紀たちを指差した。

—————☆—————

「……かのたちだって、簡単に倒されやしないんだから。あやぼん

はひとりですっ飛ばされたからあんなっちゃったけど、かのたちはふたりだもんね！」

華乃が両肩のキャノン砲からレーザーを放つ。それすら締は、右へ跳躍していても簡単にかわしてみせた。

しかし、

「とうっ！」

「！？」

躲したところにワイヤーにつながれた針が飛んでくる。締はすんでのところで身をひねり、直撃はまぬがれた。

「あらあら、避けられてしまったね」

「チッ……まさか、射出式になっていたとはな」

晶紀の左の拳に装備されていた針。それが飛んできたのだ。

「……しかもそれ、ただの針じゃねえな？」

「ご明察。わたしたちのこのスーツは、核爆発の衝撃にだって耐えられる強靱な素材・カシオナイトでつくられているわけだけど……唯一、弱点があるんだよね」

牢獄の床に刺さった針が、バチバチと音を立てている。時折青い稲妻が走る。

「電撃か。田之上のやつ、厄介なものを作りやがったな」

「その通り。わたしは言わば、対 Reverse Cross System 用につくられたサイボーグ……そのためにブースターも全部取っ払っているんだもの。言うまでもなく華乃のレーザー砲も、

電気を帯びてるから」

晶紀はいつものように笑顔だった。しかしその裏には、得体の知れない怖さがあった。

「ほらほら、よそ見してると死んじゃうよお！！」

再び華乃のレーザー砲が締を襲う。それを躲したところに、晶紀の電気針が飛んでくる。

この二人のコンビネーションは、真寧から見てもかなりやばい。ここにもしまともな状態で彩が参加できていたら、締は瞬殺とは言わないまでも、かなり早いうちに倒されていただろう。

「ぐあうっ！」

「縛くんっ！！」

ついに針の一本が、締の脇腹をとらえた。

「あつれえ？　ただで済まさないんじゃないのかつのおー？」

「雑魚とか、ゴキブリとか言ってたけど……意外と大したことないんだね、縛くん」

「……くっ！」

苦しみながらも締は針を引き抜いた。だが、これで大きなダメージを受けたのは確実だ。

そんな締を、さらなる絶望が襲う。

「「デッドリー・ブロウ」」

華乃の身体的全砲門が、締に向けられる。

晶紀の針だけでなく、左腕全体が帯電し始める。

「やめて……やめて」

このままじゃ、今度こそ縛くんが死んじゃう！

「やめてええええええっ！！！」

こらえきれなくなった真寧は、思わず締の前に飛び出していた。

「……何の真似？」

晶紀は眉間にしわを寄せた。

「こんなこと、もうやめてよ！　二人とも正気にもどってよ！　みんな、あんなにやさしかったでしょ！　もとの二人にもどってよっ！」

絶望したときにすら出てこなかった涙を浮かべ、真寧は叫んだ。

しかし。

「あー……ぬばっち、うるさい」

その懇願を受け入れる者は、どこにもいない。

「きゃあっああああ！？」

華乃が手の甲の電磁砲を放った。電流でできた球体が、真寧の腹部に直撃した。

「うぐあああああつ、あああああ」

「ちょっと華乃、そんな物騒なもの使っちゃダメじゃない。下手したら死んじゃうよ」

「えー、だってうざかったんだもん。これくらいべつにどうってことないって」

華乃は唇を尖らせ、改めて締に銃口を向けた。

「さあて、邪魔者も消えたことだし。さっさとやっつけちゃおー！」

「やめ……てえ……」

真寧の願いも虚しく、レーザーがチャージされていく。帯電が激しさを増していく。

その標的——締はどうしていたかというと。

「はやく……にげてよ……縛、くん……！」

「……冗談じゃないね。この程度のことで逃げてられるか、ククク」

笑っていた。その場から一步も動かず、立ち上がることもせず、ただ笑っていた。

「……何が可笑しいの？ 気持ち悪いんだけど」

「いや、お前ら如きが俺に勝ち誇ってることが滑稽でな」

「はあ？」

「……どこまでも腹立たしいね。いったいどこからそんな自信が湧いてくるの」

「さあな、俺にも分からん。ただ一つ確実に言えるのは、俺はこの現状を確実に打破できる手段を持っている……ということだけだ」

「……じゃあ、やってみなさいよっ！！！」

晶紀の心の内で、ぶつりと何かが切れた音がした。

「ディバイン・パニツシャあ————ツ！！！！！！」

晶紀の声を認識し、左腕の電流が、拳の針へと伝わり放出される。

無差別なる神罰が牢獄に下される。

「わわわ晶紀ちゃん、ちょっと激しすぎだよっ！ よーし、かのも負けてらんない！」

レーザーのチャージはすでに最大限。あとは撃つだけだ。

「インディスクリミネーション・バーストおおおおおッ！！！！」

飽和しきった光の奔流がついに解き放たれる。乱舞する電雷と滅びの光条に、真寧は目を覆った。

とても長く感じた数秒間が過ぎ、真寧はかろうじて無事だった。

「げほっ……ど、どうなったの……………」

まだ粉塵が立ち込めていて、辺りがよく見えない。牢獄の古い蛍光灯は無残に割れ、壁は消し飛んで鉄骨だけになっているようだ。

「嘘でしょ……………」

晶紀の声がして振り向くと、彼女はなぜか空いた口がふさがらなくなっている。華乃も同じ様子で、ただ一点、真寧の真後ろだけを見ている。

(真後ろ……………ってことは!?)

はっと振り返ると、そこには、誰一人想像もつかなかったものがそびえ立っていた。

盾。厚みはないが巨大な、盾だ。もはや壁と言っても過言ではないそれが、全ての攻撃から締を守ったのだ。

「こんなものをどこから……っ!? まさか、オペレーション!?’

「その通り、だ……」

盾の陰からどさっと、生身の締が姿を現した。

「正気の沙汰じゃないわ! この状況で生身になるなんて!」

「この装甲の弱点は、確かに電撃だ。でもその理由は、電導性が高く、人体に危険が及びやすいというだけだろう? 単純に電撃を防ぐことだけを考えれば、一旦身体から離して、アースとして使った方が有能なんだよ」

説明している間にも盾は少しずつ崩れ、締の身体へと戻っていく。

「……華乃! 生身の今のうちに、撃ち殺して!」

「えっ? あ、いけないっ!」

華乃はとっさに立て続けに電磁砲を撃った。しかし突然の要求のため狙いがうまく定まらず、締には当たらない。

「さあて……これで終わりか?’

「……………っ」

華乃と晶紀の^{デッドリー・ブロー}必殺技は、ともに一度撃つと長時間使えないものだ。よってこれ以上の決定打は望めない。

「どうやら手駒は使い切ったみたいだな……それならこちらも、そろそろ攻勢に出るとしよう」

装甲の復活が完了し、締は立ち上がる。

「強がりもほどほどにして! 電流がある限り、こちらの優勢は変わらないっ!」

「……いや、晶紀ちゃん。そうでもないかも」

「えっ?’

華乃が、何かに気づいたように青ざめた。

「こいつまだ……^{デッドリー・ブロー}必殺技、使ってない」

「!」

晶紀は、顔から血の気が引くのを感じた。

「そうだ。お前らは手の内を見せ終わったが……俺には、まだある。それも^{デッドリー・ブロー}必殺技がな」

締は、大人びた顔を不敵に歪めた。

「デッドリー・ブロー」

「ひっ!?’

「慌てないで、華乃! 所詮は Ver. 0.0……きちんと対処すれば、怖いことなんてない!」

そう言いつつも、晶紀の声からは明らかに恐怖が溢れだしていた。

果たして——その時は訪れた。

「クリムゾン・エンペラー！！！！」

締の全身の装甲が、ボシュッと音と煙を立ててスライドする。カラーリングは鋼色から真紅へと変化し、ブースターの発光も水色から赤に変わってゆく。

「なに……？　こんなの、みたことない……！」

「落ち着きなさい！　ただ、見た目が変わっただけじゃない！　あれだけ怖がらせた割には、しょうもないのね！」

確かに。必殺技と銘打った割には、今のところ見た目が変わっただけで、直接的にダメージを与えるようなものではない。

しかし、彼がこれで終わるわけがない。

「これだから真面目ちゃんは困るな。お前、ゲームとかやったことないだろ」

「……それが何？　そんなもの、興味もない」

あからさまな強がりだった。こいつは、得体が知れなさ過ぎる。

それが怖い。

「お前は知らないだろうが、格ゲーだったり、RPGだったり……そういうのには色々な必殺技がある。もちろん直接相手にダメージを与えるものもあるが……その中には、自身を強化するものもあるんだ」

「……………まさか！」

「そう。俺のデッドリー・ブロウは、まさにそのタイプだ。自身のブースターの性能を、五時間だけ十倍に引き上げる……それが俺の、“クリムゾン・エンペラー”」

晶紀は今度こそ素直に恐怖した。

「じゅ、十倍ですって！？」

「ああ、そうだ。パンチ力に換算すると……今まで1トンだったのが、10トンになる計算だな」

「10トン！？」

彩の『ハリケーン・スラスト』で、確かそのくらいの威力があったはずだ。それを、ただのパンチで出せる……全ての攻撃が、デッドリー・ブロウ級の威力が出ることになる。

「ちくしょおおおおおおおおおっ！！！！」

「ちょっ、華乃！？」

ついに錯乱した華乃が、電磁砲を乱射する。しかし——

「ククク、ノロいノロい」

ひよいひよいと締はそれをかわし、華乃に向かって歩きはじめる。

「華乃、やめて！」

「ひいっ!？」

真紅の皇帝は、未だ止まらない。

「こ、来ないでっ! わたしを殺して何になるの! 復讐なんて無意味だよ! だからやめて、おねがい!」

「この状況でそんなことを言われても……全く心に響かぬえな」

「縛くん……いや、^{しまり}締さま! 何でもします! だから……だから命だけはっ!」

晶紀は無意識に土下座していた。生きられるならプライドなんてどうでもいい。何でもするというのも本心だ。

「……何でも?」

食いついた!

「ええ、何でもします! 命さえ助けてくれるなら……締さまの言うことなら、何でも!」

仮面に隠されて締の表情は見えない。しかし……彼がこの状況を存分に楽しんでいることは明らかだった。

一体彼は何を要求するのかと、真寧は固唾を呑んだ。その、やっぱりアレなのかな……。何せ『何でも』だし……

しかし締が、そんな生ぬるいものを要求するはずもなかった。

「それじゃあ……十秒間ほど、サンドバッグになってもらおうか」

「えっ……!? そ、そんなことしたら、しんじゃう……!」

今の締に殴られれば、一発でも致命傷だ。それを十秒間とは、もはや死刑宣告に等しい。

「それはお前が耐え切れなければの話だ。たった十秒だけだし、良心的だろう」

「そん……な」

晶紀の顔に、絶望が浮かんだ。

「どの道お前に拒否権はない。いさぎよく、潰れろ」

「ま、待って! 他のことなら、なんでもいいからっ! やめて……こないで、こないでえええっ」

非常なる魔王の裁きの鉄槌が、咎人に下される。

☆

締が晶紀を処刑してから、一分ほどが経過した。しかしまだ断罪は終わったわけではない。

「ちょ、ちょっとまってえ————つ!!!!」

轟音とともに、締が天井含め通算二十枚目となる壁を破壊する。

「いちいち騒ぐな。置いてくぞ」

「いや、そそそそれはダメだけどぎよわっ!!!!」

二十一枚目も無残に蹴り碎かれた。

この建物は、どうも山奥に秘密裏につくられた研究所らしい。だ

が思いのほか広く、最終目標の田之上を探すため、現在締は真寧を脇に抱えて爆走中である。

「それにしても……縛くんって、意外とドSなんだね」

「そうか？」

「うん。だって晶紀をぼっこぼこにしてたとき、なんか生き生きしてたもん」

『いいーち、にいーい、さぁーん』という悪魔のカウントダウンを、真寧は一生忘れられる自信がない。特に最後の『じゅ————

————う』は、あれだけで七秒くらいあった気がするのだが。

……あれでよかったのだろうか。締が彩たちを断罪する間、真寧は何もできなかった。ただ蹂躪されていく元友人たちを呆然と眺めていることしかできなかった。

締の行為が百パーセント正しいとはどうしても思えない。裏切られたとはいえ、数分前まで友達だと思っていた彼女らへの情もそこには多少混じっているのかもしれないが、復讐が堂々と認められることではないとは言える。

しかし……百パーセント間違っているとも、胸を張っては言えない。締は右腕を失い、望んでもいなかった強大な力を無理やり植え付けられ、それより先に約束されていたはずの普通の青春までも失った。例えるなら、必要のないものを売りつけ、法外に高い料金を要求する押し売りにあったようなもの。しかもその代金は永久に戻っては来ない、彼の時間。そこまでされたのであれば、多少押し売りに石を投げても文句は言われまいだろうとも思える。

「るぐふっ！！」

「お、これで最後みたいだな」

二十二枚目の天井が砕け散ったところでやっと屋上に出た。真寧が事故に遭って何回目かは分からないが、すでに夜が明けようとしている。

「待っていたよ、アインヘリアル」

「……………田之上」

締は真寧を脇に下ろした。

田之上光彦が、特に武器も持たず丸腰で、そこにたたずんでいた。

「カシオナイトはね、人間の脳内の電気信号……つまり、イメージを忠実に読み取り、その通りに形を変える性質があるんだよ。ボクがカシオナイトを発見したのは、ちょうど三年前のことだ。彩ちゃんたちはノーベル賞だ何だと騒いだが、こんな裏稼業の人間がそんなものをもらえるはずがない。

そしてボクは、それを自分の研究に利用することにした。サイボーグの製造が夢だったボクにとって、この素材は画期的だった。脳内に発信機となるデバイスを埋め込めば、好きな形に変えられるんだからね。

さらにボクは、永久機関となる鉱石・オーブにデバイスを融合させて、ついにこの Reverse Cross System を完成させた。ここまでボクは、人類の歴史を塗り替えかねない大発見をいくつもしている。なのにボクはそれを自分の研究のためにしか使わなかった。だって、みんなが幸せになることになって、ボクは興味ないからね。ボクはもっと血なまぐさい世界が

好きなんだよ。生きるか、死ぬか……そのなかでボクは、ボクたちは、無敵の存在になる。
これ以上に素晴らしいことがあるかい？」

「……さあな。俺にとってはお前をぶちのめす以上に素晴らしいことはないから、いまいち
分からない」

二人の間に緊張が走る。

「どの道お前の発見は、人類にはまだ早すぎる。生まれる時代を間違えたな」

「それはボクも痛烈に感じているよ。せめてあと五十年は遅く生まれたかった」

互いをしっかりと見据える。静謐の水面に滴が落ちるのを、今か
今かと待っている。

「……消えろ！」

締が満を持して動いた。真紅の雷光が、田之上へと一直線に駆け
てゆく。

「うん、素晴らしい。昔と変わらない性能だね。……でも」

「っ!？」

猛スピードで走っていた締が、突然体勢を崩し、そのまま屋上の
縁に激突した。

「がはっ……………！」

「どうやら、時間切れのようだ」

(……時間!)

締の「クリムゾン・エンペラー」は、五分間だけブースターの性
能を十倍にする技だ。卒での戦闘といい田之上の搜索といい、時間
をかけすぎてしまった。

「キミの必殺技は、一回使うと疲労も大きいからねえ……疲れて動けなくなったキミを、ボ
クはちゃちゃっと片づけるだけでいいわけだ。わざわざ自滅してくれて、頭の下がる思いだ
よ」

「……ぐあああっ!!」

田之上は締の頭を勢いよく踏みつけた。

「逃げ出したものは仕方ない、どうでもいいと思ってたけど……このまま放っておくと、キ
ミはボクの障害になりそうだ。ここで消えてもらうよ」

締よりもさらに旧式とはいえ、田之上の体もカシオナイト製であ
る。同じ素材であれば、圧力が一定限度を超えれば破壊できる。

「ぐあああっあああああああああああああああああああああ」

「さよなら、アインヘリアル」

ついにマスクにひびが入り、締の頭部が無残に踏みつぶされよう
とした、その時だった。

「インストレーション!!!!」

「っ！？ Ver5.0……なぜ、起動音声を知っている！ ボクは単語しか教えなかったはずだぞ！」

田之上は思わず足を止め、振り返った。

「縛くんや彩たちが言ってたのを見たら、さすがに気づくよ！ あたしのこの腕だって…
…同じことができるはず！」

締や彩たちの義肢と同じように、真寧の左腕の表面が波打ち、身体を覆い始める。

「やめろ！ その体でお前に何ができるんだ！ それにお前は、まだ詳しい使い方を知っているわけじゃないだろ！」

「そうだね、^{しばり}縛くん。あたしは、まだ何も知らない。だからあたしは、これから知るために戦うの！」

「……………！？」

ひび割れたマスクから締の目がのぞいている。『バカかお前は』…
…そう言っているように見える。

「こいつを倒して、それから、縛くんに教えてもらうんだもん！ その未来をつかみ取るんだ！ もし負けても、あたしに悔いはないよ？ だって、キミのために、初めて何かできたから！」

直後、装着は完了した。

目が眩むような黄金のフォルムだ。全身が金色で彩られ、時折白のラインが入る。膝やかかと、肘などの関節部には、締や彩と同じようにブースターが取り付けられ、頭部には鳥が羽を広げたような左右対称の装飾が施されている。

Reverse Cross System の、究極にして終極の戦士。

Ver. 5.0——『メタトロン』。

「チッ……………！」

田之上は腹立たしそうに頭をポリポリと掻いた。本来ならばここで問題なく締を始末し、真寧を回収して研究に戻る予定だったが、計算が狂ってしまった。戦闘はまぬがれない。

だが自分には勝算がある。いくら集大成の究極戦士とはいえ、製作者は自分だ。それに対して相手は、まだ右も左も分からない状態。それにこの究極の鎧を作ったのは、反逆されたとしても、それを制圧できるだけの力を田之上自身が手にしているからだ。

「アインヘリアルの二の舞とはいかないよ？ ボクは常に学び、進化する！ サイボーグになって数十時間のひよっ子に、ボクが負けるものか！」

そう言って田之上は、右の二の腕のアーマーを開き、中にあったスイッチを押す。

「がふああっ！！」

田之上のあごに、真寧の拳は直撃した。鼻から下の部分が、無残にも砕け散る。

そして——それを行った真寧も。

「わきゃう！」

床を何バウンドかして、ついに倒れた。事故の重傷がここへきて、ついに真寧の動きを止めた。

「……はあ、はあっ……………」

立ち上がろうとしてもすぐに崩れ落ちてしまう。もはや一歩たりとも動くことはかなわない。

対する田之上は……というと。

「フヒヤハハハ……素人の割に、やってくれるじゃないか」

「……………！？」

砕け散ったあごは機械化されていた。露わになった喉元のスピーカーで会話している。

「言っただろう？ 以前からの自分を使った実験で、ボクの体は脳組織と心臓以外のほとんどが機械化されている……この程度のダメージでは、ボクは倒れないッ！！！」

一切の支障なく立ち上がり、再び右手のガトリングガンを構えた。

「どうやらこれで動きを止めなくても、もう微塵も抵抗できないようだねえ。でも、念のためこれくらいはしておこうか」

田之上が言うと、今度はその左手が、ガシャンガシャンと変形し

現れたのは、スタンガン。

「！」

「安心したまえ、電圧はさほど高くない。気絶くらいは当然だがね」

田之上と真寧の距離は実に十メートルほどである。このまま奴が歩いてくれば、わずか十秒余りで、真寧の意識は再び闇に落ちる。

ふふっ、やっぱりダメだったみたい。この間に、縛くんは逃げてくれたかな……………！？　なんで、なんで逃げてないの？　そこにいたら、キミは殺されちゃうんだよ？　なのにどうして、そんなに真剣な目で、あたしを見つめてるの？

「真寧っ！　デッドリー・ブロウを、使うんだっ！！」

「えっ？　……そうか、その手が！」

この義肢にそれぞれひとつずつ備わっている必殺技、デッドリー・ブロウ。あたしのはまだ名前しか分からない。故に何が起きるかも全く想像がつかない。

「……余計なことを！」

田之上は振り返り、締に銃を向けた。

一瞬の迷いも、もう許されない！

「デッドリー・ブロウっ！！！！！！！！！！」

「なっ……やめるんだ！ い、今すぐそれをとめろおっ！！！！」

田之上があからさまに取り乱す。……なに？ あたしの必殺技、そんなにやばいのかな？

だったらなおさら、やめるもんかっ！

「グロウリィ・ルピナスっ！！！！！！！！！！」

今ここで、縛くんを救えるのなら……たとえ、世界が滅んでも構わない！

果たして何が起きるのか。真寧と締が固唾を呑んだ瞬間——突如、真寧の変身が解除された。

「……………えっ？」

真寧は何が起きたのか分からなかった。ただ、突然身体が軽くなったのを感じた。

そして——絶望した。

「う……そ……あれだけ、期待させといて……そんな……ことって」

これも、田之上の策略の一部だったのだ。締に罪はないが、最終的に追い詰められた真寧がデッドリー・ブロウを使うのは、田之上にも予測できていたにちがいない。最初からこの勝負に真寧が勝つことなど不可能だったのだ。今すぐにでも、この男の笑い声が聞こえてくることだろ

(……………あれ？)

聞こえてこない。はっとして前を見ると、田之上は当初のとおり、ただ真寧の後ろを見つめ、がくがくと恐怖に震えていた。締もあっけにとられたように、田之上と同じ場所を見ている。

「なに？ あたしの後ろに、いったい何が……………！？」

やけくその苛立ちも混じって真寧が振り返ると——それが、いた。

目が眩むような黄金のフォルムだ。全身が金色で彩られ、時折白のラインが入る。膝やかかと、肘などの関節部には締や彩と同じようにブースターが取り付けられ、頭部には鳥が羽を広げたような、左右対称の装飾が施されている……真寧の鎧そのものが、そこに立っている。

『……………コイツヲオシテ、シバリクンに、オシエテモラウンダもん』

「……………しゃ、しゃべった！？」

真寧の声を少し加工したような機械的な声で、それは言葉を発した。

「バカな……いったい、これは……」

「自立稼働型戦闘プログラム、『ルピナス』だ……」

呆然とする締と真寧に、田之上は呟いた。

「意のままに義肢の形を変える、オペレーションの発展形……ある一定の強さを超える脳内の電気信号……すなわち強い『思い』をオーブに保存し、その思いに沿って動く。『思い』を『遂げる』まで、こいつは止まらないんだ！ 何も考えてなさそうな、普通的女子高生を選んだつもりだったのに……まさか、これほどの『思い』を生み出すとはっ！」

現在の真寧の思い……それは『この男を倒して、縛締と生きて帰る』こと。つまりこの鎧は、田之上を完全に沈黙させるまで止まらない。それをこいつは恐れていたのだ。

「そういうことなら……やっちゃえ、ルピちゃん！ その男をぶちのめしちゃって！」

『ソノみらいヲ、ツカミとるンダ！！』

真寧の思いを胸(?)に、ルピナスが駆けだす。

「ちくしょう、来るんじゃあないッ！！！！」

田之上も負けじとガトリングガンをダダダダとひたすら撃ちまくる。その一発がルピナスの頭部に直撃した。

「ルピちゃんっ！」

真寧が叫ぶ。しかし――

『アタシハ、マダなにもシラナイ……』

風穴の空いた頭部は、その破片を吸い上げ、即座に再生した。

「自動修復！？ ここまでの『思い』だとっ！？」

田之上が驚愕する間にも、ルピナスは近づいてくる。腕を吹き飛ばされようが、胸に風穴を開けられようが、いくらでも復活して。

「ちくしょうっ、どうすりゃいい……！ そうだっ！」

フッフフ、フヒヤハハハハと、田之上は勝ち誇ったように笑った。

「ボクとしたことが、完全に忘れていたよ！ 本体となるキミを潰せば、こいつだって止まるはずだっ！」

じゃきん、と銃口が真寧に向けられる。撃鉄が体内で撃ち起こされ、いざ、獲物を仕留めん

「させるかっ！」

「っ！？」

――と、右腕はあらぬ方向を撃ち抜いた。かろうじて起き上がった締が田之上の右腕をひつつかみ、弾道を変えたのだ。

「こしゃくなァッ！！ どけ、前時代のガラクタがっ！」

「今だ、やれえっ！！！！」

『……ダカラ、アタシハ』

締の号令に応じたかのように、ルピナスが拳を構えた。

「やめろ……やめるんだ！　ボクはお前の製作者だぞ？　生みの親なんだ！　お前は親を殺すのかっ！」

「……あなたは、あたしの親なんかじゃない」

「！？」

恐れおののいた田之上に、真寧は語った。

「今のルピちゃんは、あたし自身も同然なの。縛く人を救うために、あなたを倒すためにただ戦ってる……これがあたしじゃなくて誰なの？　あたしにこの腕をつけた時点で、ルピちゃんはあなたのものじゃなくなったの。あたしのお父さんは、お母さんは、もっと素晴らしい人。あなたみたいな人間のクズとは違う」

「黙れこの低能っ！　キミたちとボクじゃ頭の出来が違うんだ！　この人類代表級の天才が、こんなところで死ぬなどありえない！」

最初に感じた穏やかな印象は、すでに彼の顔から消え去っていた。この男はただのマッドサイエンティスト。天才は天才でも、歪んだ理想を追い求める狂気の鬼才だ。

『コレカラ知るタメニ、タタカウのっ！！！！！！』

「やめろ……やめろおおおおおおおおおッ！！！！！！」

断罪の拳が、田之上を粉碎する。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ』

右ストレート。右フック。右裏拳。全て右から繰り出される神速の連撃が、田之上の装甲を砕いてゆく。

「行っけえええええええええええええええええええ！！！！！！！！！！」

締が叫ぶ。二年にわたる確執を、求め続けた瞬間への切望を、声に乗せて。

「いっけえええええええええええええええええええ！！！！！！！！！！」

真寧が叫ぶ。生への渴望を、悪を打ち砕く正義の心を、声に乗せて。

「ヴぁ……かな……ヴおくが……壊される……破壊されデ、しまヴ……」

田之上は絶望する。人生をかけて積み上げてきたものの崩壊を、自らの人生の終末を、ひしひしと感じて。

『オオオッ！！！！』

ついにルピナスの拳が、田之上の胸を貫いた。ごふっと田之上が血を吐く。

「壊れる……ジぬ……」

心臓の破壊と同時に、全身がスパークし始めた。全器官がオーバーロードしている。

「ヴヴ……ヴはははは……ヴはははははははははは！！！！！！」

機械音の混ざった特有の嘲笑と共に、全ての根源は炎をあげて爆散した。

—————☆—————

「縛くん！ ルピちゃん！」

爆発の瞬間、締は田之上の腕を抑えたままだった。鎧も破損した状態で、あれに耐えられたとは思えない。

煙が、晴れた。

「……縛くんっ！！！！」

締はルピナスの脇に抱えられていた。何となく恥ずかしそうに、そっぽを向いている。

「ああ、よかった……ここで死んじゃったら、元も子もないよ……」

「……泣くな。それより、早く俺を下ろせ」

「ぐすっ……たぶん、それは無理じゃないかな。だってわたしの『思い』は、『縛くんと一緒に帰る』ことだから」

彼が生きている。それだけで、涙があふれてくる。

『モシ負ケテモ、アタシにクイハナイヨ？』

ルピナスが左上半身を腕のように変形させ、真寧を持ち上げた。

「ふふっ、もう勝ったよ。どうやら、連れて帰ってくれるみたい」

帰ったらまず何をしよう？ とりあえずおとうさんとおかあさんにあやまって、腕のことを説明して……いや、こんなめんどくさいのは今考えたくない。まずはお風呂に入って、あったかいごはんをたべて、たまっていたドラマでも観よう。そんな日常が、今では泣けるほど恋しい。

『ソウカ、ソノテガ』

ルピナスはまたも真寧の言葉を反芻して、屋上のふちへと歩き出した。

……………え？

「ちょっとまって……ルピちゃん、まさかここからとぶわけじゃないよね？」

『ワキャウ』

ルピナスは応えない。応えてはいるが、答えになっていない。

「……リベレーション」

締が最後の四つ目の単語を呟くと、彼の身体を覆っていた鎧は再び波打ち、もとの義手に戻っていった。最後のは変身解除の音声だ

ったようだ。

「あきらめろ、こいつはどうやらそのつものようだ。……それに正規ルートでの脱出も、どうやら難しそうだしな」

諦めているのか覚悟ができているのか、締がひょうひょうと呟くと、真寧もその異変に気づいた。

「あちゃー……こりゃ、ダメっぼいね……」

ばきばき、みしみしと、研究所全体が音を立てている。締が田之上を探す際に壁をばかすか打ち壊した影響がここへ来て現れていた。

「……って、縛くんのせいじゃない！ どーしてくれるの！」

「別に、こいつなら飛び降りても大丈夫だろう。それにこれは計算の内だ。俺がしらみつぶしに探していたとでも思っていたのか？」

「……………はいはいどうのことですか、締さん」

もうそろそろこの男の態度に苛立ちを感じ始めてきた。人を食ったような、なんというか横柄な……。

『締さん』の部分でなぜか顔を赤らめて、締は続けた。

「ご、ごほん……この研究所には奴の研究の全てが詰まっている。本拠地であるここを壊滅させてしまえば、その成果はこの世から抹消されるはずだ。……もう、俺たちのような悲劇を生まずに済むんだよ」

「……………ほおー」

よく考えているな、と素直に思った。『倒して、帰る』ということしか考えていなかった自分とは大違いだ。

「まあ、奴の所属組織にバックアップがあれば別だがな。あいつの性格上、成果は独り占めしたいはずだ。だったら研究所ごと潰すのが一番確実だろう。そして俺は首尾よく奴を葬り、お前を抱えてさっそうと去っていくのが俺の計画だったんだが……どこで間違えたんだろう」

「とりあえず、晶紀をイジメるのに時間かけすぎだったとあたしは思うな……………あつ！ そうだ、晶紀たちはどうするの？ ここに取り残していったら、危ないよ！」

「放っておけ。あいつらも闇の世界の人間だ、なんとかするだろう」

「そ、そこは雑なんだね！？」

まあ、彼女らなら確かに何とかできそうな気もするが。

そうこうしているうちに、ルピナスは屋上のふちにたどり着いていた。

「ルピちゃん……ほんとにこれしかないの……？」

『……………』

今度こそルピナスは無言だった。

もういいわかった。女射干田^{ぬばたまね}真寧、覚悟を決めよう。帰るにはも

らその力を人に認めてほしかっただけだ。別に何も変わるわけでもないのにな」

フッ、と締は鼻で笑った。自嘲だ。

「……………そうだね」

「？」

真寧はそれをあっさりと認めた。きつとこいつなら否定してくれる、と思った締にとっては、予想外だった。

だが、認めたのには理由がある。

「あたしね、優しさなんて全部自己満足だと思うよ。だって人に優しくするのって、幸せになるもん。でも、それは相手も同じ。優しくされた人も、優しくした人も、どっちもいい気分になるの。だから優しさって素晴らしいんだよ。縛くんがやってきたこともそれと同じ。縛くんにも、他の人にとってもいいことなの。だから結果的に縛くんはやさしい人なんだよ。人に認められる、すごい人」

「……俺が、優しいだって？ 人に認められる人間だって？」

「うん、そうだよ。その腕だって一緒。その腕はもう、人に認められてるの」

「……………そうか……そうだったのか」

締の目から、自然と涙がこぼれていた。

「じゃあ、俺は……ぼくは、もう、みんなとなかよくなってもいいんだね？ ひとりぼっちじゃなくても、いいんだね？」

「……うん、そうだよ。キミはもう、一人じゃない」

長かった夜は、ついに明けた。これから締に、そして世界にとって、新しい今が始まるのだ。

—————☆—————

「……………真寧、どうした？ ポーっとして」

「……うん、ちょっと思い出してね。半年前、あたしたちの新しい人生が始まったあの日も、こんなきれいな朝焼けだったな、って」

「フッ……そういやそうだった。あのときから僕は、もう ^{ワンサイド・ウイング} 片翼じゃあなくなったんだよな」

「そうだね。あたしと縛くん、二人で一对の『はがねのつばさ』」

とあるビルの屋上。昇りくる朝日を眩しそうに見つめて、笑った。

「さて、気を抜くんじゃないぞ？ 火災発生から十分……消防隊も善戦しているが、まだ逃げ遅れた人がいるようだ。さっさと片づけよう」

「うん。ちゃちゃっと助けて、はやく学校にいこうか」

真寧は左手を、締は右手を。明日を眺めて、二人は太陽にかざす。

「「インストレーション！！」」

〈完〉